

## 大学生の映像メディアに対する意識と実態 －「不便さ」を中心として－

井手 亮太

インターネットを利用したサービスの普及に伴い、人々の映像メディア環境は大きく変化した。特に若者である大学生は、ただテレビ放送を見るだけでなく、テレビ受像機にインターネットを接続してビデオオンデマンドサービスを利用したり、スマートフォンやパソコンで様々な動画コンテンツを視聴したりしている。しかし、多種多様な映像コンテンツをあらゆるサービスから自由に視聴できる反面、そこにはテレビを映像メディアの中心としていた時代にはなかった「不便さ」が新たに生まれつつある。そこで、現在の大学生がどのような映像メディア視聴行動をとっているのかを分析し、そこにどのような「不便さ」が存在するのかを明らかにすることで、これからの映像メディアのあり方について考察した。

調査は半構造化インタビューと質問紙調査の2通りの方法にて実施した。半構造化インタビューでは、大学生の映像メディア視聴形態と映像メディアに対して抱いている「不便さ」についての質問を行い、今の大学生の現状を明らかにした。質問紙調査では、53名の大学生に対して、半構造化インタビューで明らかになった知見を基に、どのような視聴行動をとっているのか、また想定される「不便さ」に関してどの程度不便と感じているのか、オンラインフォーム上で調査を行った。さらに、なぜ今の映像メディアに対してそのような「不便さ」が感じられるのかを明らかにするため、映像メディアの中心がテレビであった時代に感じていた「不便さ」や当時の視聴行動についても調査を実施した。

映像メディア視聴形態について調査したところ、利用する映像メディアのアスペクト比（縦横比）に合わせて視聴媒体の使い分けを行ったり、映像の尺によって映像メディアの使い分けを行ったりと、それぞれの映像メディアの特徴（アスペクト比、尺、内容、機能、コンテンツの量の豊富さ等）によって、大学生が映像メディアの使い分けを行っていることが明らかとなった。さらに「不便さ」に関しては、「UI（ユーザーインターフェース）」、「広告・金銭面」、「権利」、「コンテンツの量の豊富さ・少なさ」の項目に関する「不便さ」があげられ、中でも広告に関しては、不便であると感じる度合いが最も高かった。また、テレビが中心だった時代の「不便さ」としては、家庭用録画機器に関するものがほとんどであり、今とは異なった「不便さ」が挙げられた。

このように、一昔前と違った新たな「不便さ」が出てきた理由としては、新しく普及してきた映像メディアの背景に、広告収入や権利の問題などの社会システムが昔から変わらないまま存在し続けているという状況が挙げられる。よって、今の大学生が映像メディアに求めるものは、社会システム、そしてそれに伴うサービスの改善である。今後の映像メディアには、映像視聴時に、公共性のなき広告や権利関係等、他から強く制約を受けない環境にしていくことが求められるに違いない。

（指導教員 横山 幹子）